

されている。それは、人口センサス間における全国標本による人口調査の未実施、外国人の対象除外、年齢別移動人口の統計の欠落、出生、結婚、離婚に関する静態調査、標本調査の不足、世帯の個人別集計（特に高齢者、子供、女性の視点に立つ）による統計の未整備、日本による人口統計に関する国際協力のあり方に関する研究等である。

(山本千鶴子記)

日本人類遺伝学会第40回大会の参加報告

日本人類遺伝学会第40回大会は平成7年9月20日から22日にわたり熊本市民会館で開催された。プログラム内容は特別講演、教育講演、学会賞受賞講演（各1題）、学会奨励賞受賞講演、モーニングレクチャー、ランチョンセミナー（各2題）、シンポジウム2題（10演題）、一般演題218題の発表が行われた。

主だった内容をみると、榊佳之氏の特別講演「新しいフェーズに入るヒトゲノム解析計画—マップからシーケンスへ」では、これまでのヒトゲノム計画5年間の成果は遺伝子地図を中心としたゲノム解析、次の5年間は遺伝子地図をもとに疾病、特に多因子病に関連した遺伝子マッピングの大々的展開、マップ（地図）からシーケンス（配列）レベルの解析へと進展しつつあることが報告された。シンポジウム「奇形の遺伝学」では、中村祐輔氏が「奇形症候群の責任遺伝子のポジショナルクローニング」について報告した。すなわち、染色体異常を指標として遺伝子を追いつめていく方法により、その疾患の原因遺伝子の解明につながるものと考えられると報告された。一般演題の主なセッションとして「遺伝子地図Ⅰ～Ⅵ」（26題）、「DNA診断・遺伝子の構造解析Ⅰ～Ⅲ」（13題）、「多因子遺伝Ⅰ～Ⅳ」（18題）、「染色体Ⅰ～Ⅶ」（40題）、「出生前診断・遺伝相談Ⅰ～Ⅱ」（11題）であった。

総会では「遺伝性疾患の遺伝子診断に関するガイドライン」12項目についての提言があり、それに続き討議が行われた。総会の前日、このガイドラインはマスコミにも公表され、新聞各紙で取り上げられた。

(今泉洋子記)

日本社会学会

第68回日本社会学会大会は、東京都立大学にて9月23、24日の両日開催された。

計52の部会、自由報告論題207を数え、これにテーマ部会4、会長講演が加わる。会員数は2,700人を越えた。今大会の特色を記すと

- (1) 阪神・淡路大震災が地域社会にいかなる影響を与えたか、テーマ部会および自由報告計7本の調査発表がなされたこと。
- (2) アジアを中心とした海外調査報告がめだち、かつ留学生の発表が数多くみられるようになったこと。
- (3) 人口関係としては、「人口・家族形態のコーホート分析（中村隆、長谷川公一）」・「有配偶女子就業の家族関連要因（小島宏）」などがあったこと。
- (4) テーマ部会の一つ「戦後の日本社会の成熟と終焉」では、落合恵美子が「世界史の中の戦後日本家族」を発表。「体制（regime）としての戦後日本」について長いスパンの中で女性の主婦化、二人っ子化、人口学的移行期世代による核家族化、1975年以降の家族の個人化、家の終焉等について発表。山田昌弘がこれにコメントした。

他にはエスニシティ、環境関係の若い研究世代が層を広げていることが印象に残った。

これにひきつづく9月25日、上智大学にてアジア社会研究会が開かれた。今年は「現代アジアにおける都市農村の構造連関」を共通テーマにして、フィリピン、タイ、中国の部会を午前、午後は全体会であった。

日中共同調査が広がる中、今回は東北大学を中心とする農村社会学者（細谷昂代表）が中国・河北省社会科学院農村発展研究所（牛鳳瑞）との共同調査発表が日本社会学会にひき続いてなされた。一人っ子政策と社会保障関係で実証的報告がされ、日中共同調査のあり方にも大いなる前進とうけとめられた。

(若林敬子記)